

偽ハイキュー！！ 月島蛍の元カノは影山飛雄と付き合ってみた

由比レギナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもハイキュー!!の登場人物と付き合えるのなら、誰と付き合いたいですか？

そんな想像をしてみた結果、なぜかこんなことになつてました。
マイクに二時間かける頭はイイけど色々と残念な女子高生、高梨芹（たかなしせり）は、月島蛍と付き合っていたものの、烏野高校入学早々、ケンカをしてしまう。

どうせすぐに仲直りするだろうとタカをくくつていた芹だが、ある晩バレーボールの練習をしていた二人と関わったことがキツカケで、とんでもないことになつてしまつた。

「じゃあ王様、賭けをしようよーー僕が負けたら、彼女を君にあげるつてどう？」

更新は気まぐれ。

感想お待ちしております。

あたしやこの時はスッピンである

目

次

1

あたしやこの時はスツッピンである

あたしの朝の日課は、ゲンジの散歩だ。リードをグイグイ引っ張る勇ましさに反して、フリフリと揺れているお尻が愛らしい。名前の由来は、彼氏の名前だつた。この柴犬を飼い始める時に、彼氏に『ホタル』と名付けていいか訊いたら、即答で『は？ キモチワル！』と嫌がられたので、仕方なく『源氏蛍』から『ゲンジ』と名付けた。

あたしの彼氏の名前は、月島蛍。蛍と書いて、ケイと読む。『あなたの名前から取つたのよ』なんてわざわざ言つていないので、自分からそう察して『気持ち悪い』というアイツのほうが、自意識過剰で気持ち悪いと思うが、それを言うとすぐ口論になつて、『僕は別れてもいいんだよ？』とか言うから、あたしはグッと堪えてあげた。どうせ別れるつもりなんかないくせに、すぐにそう言うから面倒だ。一日連絡しないだけで、すぐドヤ顔のスタンプを送つてくるくせに。

そんな男と付き合いだして、もう二年になる。

中学一年生のバレンタインの時に、例年通りにチョコレートをあげたら、ホワイトデーのお返しの時に『お返しを買うなんてわざわざ面倒だから、代わりに君の彼氏になつてあげるよ。それでいいデシヨ？』なんて言われたのが、付き合うキッカケだつた。『なんて面倒な男だ！』とその時改めて認識したのだが、少し視線を逸らして照れてる顔を見たら、思わず頷いていたのだから仕方ない。蛍とはもう十年以上の付き合いだつた。その中で、あんな可愛い姿はまず見たことがなかつたのだ。ちなみに、蛍とは家が隣同士の幼馴染でもある。そして、付き合いだした当日から、両家公認の仲だつた。告白シーンを、蛍のお兄ちゃんに見られていたのだ。

去年から飼い出したゲンジは、まだ小柄ながらもパワフルだ。デカいくせに、ひ弱なアイツとは大違い。可愛らしさも段違いだ。だけど、もう少し加減しておくれ。あたしや、運動神経ゼロなんだ……。と、土手を駆け足で散歩していた時である。同世代のランニングす

る男の子とすれ違つたと思いきや、なぜだかゲンジがそいつに付いて行つてしまつたといつ！

艶やかな黒髪が爽やかな背の高い男の子。朝から清々しくてイイのは分かるが、急に方向転換して行くなゲンジよ！ 謝るから!! 阿呆な理由で女の子なのにゲンジと名付けたことに今でも文句があるなら、謝るから!! キヤンキヤン嬉しそうに鳴きながらイケメンに付いていかんでおくれっ!!

あたしの手からリードが離れたのと、あたしが転んだのは同時だった。

ずてーんと壮大に転んだ擬音語が気持ちがいい朝陽を背景に書かれて、いそうで恥ずかしい。

嬉しそうなゲンジの声が聴こえる。

あーあ、入学式そうそう顔から転んでしまうとは……烏野高校史上最上の美人女子高生誕生の瞬間に膝が汚いとか、幸先不安じやないの……としぶしぶ顔を上げた時だ。

目の前に、鋭い目つきの男の子がいた。今しがたすれ違つた男の子だ。しゃがみ込んで片手でゲンジとじゃれ合つているのが微笑ましいが、彼の顔は心配そうにしかめられていた。

蛍ほどではないが、なかなかのイケメンだ。

それに対して、あたしや今はスッピンだ。ぼさぼさの髪に、牛乳瓶の底型メガネ。中学生時代のヨレヨレジャージ。

爽やかスポーツ好青年と向かい合うには、役不足も甚だしい。

だけど、彼はそんなブチャライクなあたしに向かつて訊いてくる。

「だ……大丈夫ですか？」

「あ、あい」

涙ぐみながらそう返事をするものの、彼の表情は全然晴れなかつた。むしろより険しくなつて、ジャージのポケットをゴソゴソ漁つている。そして、

「あの、良ければこれ」

不愛想に差し出してくるのは、ヨレヨレになつた絆創膏だつた。一休何日しまつっていたのか、というより、洗濯機にも入れてしまつたの

ではないかと疑いたくなるほどの代物だったが、ここで遠慮するのも、人としての価値が下がるというものであろう。

「あ、ありがとう」

そう受け取ると、彼はちょっとだけホツとした顔を見せて、立ち上がりた。

「じゃ、これで」

「あ、はい」

会話はそれで終了。彼はまたスマートなフォームで走り去っていく。そのあとをゲンジが付いていこうとするものの、「やめれ」とリードをしっかりと握り阻止することに成功した。

影山飛雄。

あたしが彼の名前を知るのは、ほんの少しだけ後のことになる。